

---

# アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

youandAi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

### 【Nコード】

N8499E

### 【作者名】

you and Ai

### 【あらすじ】

なんだかすげーへんなことがおこっすげくなるすげ

\*：「」はふりがなであります。

@：序文という名目の戯言

私の世界はね、つまりはね、この世は薄情なんだよね。まさに薄っぺらである。それはまるで頁「ページ」のようなんだ。

それが重ねあわされ製本されて、本となり、そこらの書店で売られたり、秘密裏に地下出版されるのだ。同人誌も、また然り。

本の頁には、ほとんど同じ内容が書かれている。それが何冊も何冊も存在する。続編もある。勿論打ち切りもある。悲しいなあ。

それは何枚も何枚も無限に重ねあわされた、世界の概要であり、刻一刻と変化を遂げる、文字の禍（うず）だ……あはあは、どちらも同じ事だなあ。

ジャンルで言うならば、愛だ恋だとのラヴロマンス、血塗られたサスペンス、かつこよいSF、妄想爆発ファンタジー、難解なミステリー、おそろしいホラー、懐郷のノスタルジー、あとはみんな猥文でとても卑猥だ。

それら、それぞれ、すべてすべて収められ、みんなみんな同じ時を刻むのだ。

しかし、その本も世界構成の中核たる、物理法則からは逃れられないのでした。

つまり汚れ、角が欠け、紙が破れる。印刷時の誤字なんかは、特に顕著に文章を破滅させる。

間違いだらけのモノクロに彩られた頁は　　本は、　　荒唐無稽

で、意味不明である。  
たった幾枚数冊のそれらは、専門ショップのいつもうずたかい平積みのなかに潜んでいるのだ！

因みにこの話は、一応SFだと言う事を通告しておく。

#### @：本編開幕

彼女は、そこに一人、立っていた。因みに彼女というのは、『私』のことだ。

『私』の名前は、笹井晶（ささいあきら）。職業は学生。それなりに引籠りがちだけどね。

物語序盤だし、名前からだけでは分かんだろうで、一応言っておくが、性別は女。

読者（プレイヤー）である貴方には、関係ないけど彼氏はいない。私には大いに関係あるけどねっ！

まあ、開始直後の脱線は此れまで 以下、本文開始。

私は、これは夢であると自覚はしていた。

なぜなら私は寝ている 我が安らぎの四畳半にて栄光の情眠を貪っているからだ。

目が覚めたら、マクラのもとで労働基準本が何であろうかと言うほど酷使され続けたノートパソコンが馬鹿になり、

明鏡止水のブルーバックを輝かせ、その薄明かりのスポットライトにて、病的にまでの歡喜に満たされて眠っている私を照らしている事は想像に難くないのだ。

夏休みの友と言う名目の宿命の期限が学生の横を怒号疾風に過ぎ去る日時は今より2日も先の話である。

私は修羅場で散った若き戦士たちの屍（しかばね）の上を悠々と

踏みつけることであろう。ざまあ！

しかしそんな歴戦のツワモノもやはり、この状況には、「此れは無いだろう常識的に考えて」と思えばかりだったのだ。

私の目の前は、石ばかりだった。硬い玄武岩で建造された巨大な橋の端に私はいた。

棚干を覗くと、考えられないほどの高さだった。地上には大きい巨石建造物が乱立していた。

屋上には黒い点がいくつも動いており、此処の住人かと思われた。さすがに良くは見えないが、ヒトではないは確かだ。

灰色掛かった空には、余りにも滑稽な、2つの脈動する、太陽が浮んで、生物的な湿気を出しながら、発光していた。

これらによって、此処が凡「おおよ」そ地球ではないことが分かった。もともと夢であるのだから、そんなの関係はないのだが。

棚干にそって歩いていくと、腕を広げたヒトデと蛸を掛け合わせたような形をした小像がぼつねんとあった。

触るとポキリ音がして私の手のひらに。私はその小像を見ていると、なんだか厭な気分になってきた。

ボットその場で突っ立っていると、何処からか現れた濃霧がいつの間にやら私を取り囲んでいた。

もやもやと浮かび上がる黒眼鏡「サングラス」をかけた老人。彼はゆつくりと、私のもとへ歩み寄ってくる。

いや、歩み寄るといふのは間違いだ。何せ足が無いのだ。膝下から急に薄くなって消えていた。

そして老人が言う。だが何をいつているのか分からない。テープを早回しにしたような、甲高い音が途切れ途切れに聞こえた。

どうやら、老人は異国の 異星の？ 言葉で語りかけてきているようだった。

わけもわからないのに、老人がいきいき捲くし立てるので、はあ、ええ、などと適当に相槌を打っていた。

その後、老人は満足したようで、此方に手をぱたぱた振った。私も手をぱたぱた振った。そして逆回しをしたように、老人は、もやに還った……。

老人が居なくなる。何も居ない。いないいない……、一瞬沈黙……聴覚のブラックアウト。

濃霧は消え去り、闇だけが残る。足元の岩の橋、その下の世界、空の心臓、何もなくなり私は闇黒に立っていた。

これで覚醒であろうかそれとも、まだ続きがあるだろうか。

そんな事を考えているとやはり、まぶしい朝日が見えるのだ。だからこれは夢なのであったのだ。

それから私は覚醒し、うんと言って背伸びをするのだった。

@：目が覚めてからする事は

やけに眩しいなあと思っていたら、カーテンを閉めていなかったからであった。

私の二日ぶりの安眠を、揺るがすほどのその光量は、量子力学的に言えば思い込みなのだそうだ。

だが思い込みだなんだろうが眩しいものは眩しいのである。充血した目を腫れぼったい瞼で閉じ、私は盲目のままカーテンを閉めた。天井裏では、私がおきた事を知った大きなねずみが、大きな腹をつつかえながら這いまわっている。

垢じみたシーツにくるまれた万年床に再び身くるませたところでヤット気づき、私はあわてて時計を見る。

「朝かと思つたが、起きてみたら、真昼でした」

これはやられた。太陽神（ラー）は、時の神様（クロノス）までを狂わすのかもしれない。

「そうだ。今日はバイトだ。早く行かなくては怒られるかも知れんというか、クビである」

携帯電話を見ると、メールがきていた。案の定の内容だった。

「ギャッ！」と漫画のように叫んだ私は、急いで着替えて謝りに行かなくてはと、狭い四畳半を駆け巡り、

布団の足元にはコインランドリーで洗濯してそのまま持ってきてうずたかくつまれ、使ったり使われらなったりしたシャツやら

ナンヤラから着替えを探し出し、「おおあつたあつた」なんて喜んでいたのも束の間、私の足元 布団は一面、血に染まっていた。

足元と言ってもこの四畳半 正確には六畳で一畳半は玄関と押入れで構成されている は、

いまや血塗られた布団を中央に、勉強机代わりの小さな丸いテーブル、湯を沸かすしか能の無いポット、

粉珈琲の空き瓶、酒の空き缶、しょぼいノートパソコン、そしてそれらを取り囲むように本棚がどこか立っている。

嗚呼ア、律儀に乱立しせり環状本棚とそのお供。

汝らは不浄都市レムリアと呼ぶにふさわしいだろう。臭いからね。締め切ったカーテンからの木洩れ日に照らされ、空中を優雅に舞うチリが律儀にきらきらと反射していた。

その天井に呆然と取り付けられた場違いな文明的クーラーが哀愁を誘う、ダメ人間の部屋だった……。

話を戻そう……。

ビックリした私は倒れ、尻もちをついた。痛む尻を摩りながら、階下の住人に謝った。

そしておそろおそろパンツを触ると、ぱきぱきと粘度の高いものが乾いて固まった音がして、赤い粉が指に付着した。

私はまたやってしまったと、ため息をつき、パンツを脱ぐ。蛆虫色のおりものが糸を引いていた。

「やばいなあ。今日は生理の日であったことをわすれていたよ」

私は特に、生理に痛みを伴わないたちであった。レバーになる事も、あまり無い。

だからたまに忘れてしまう。そしてこう言う事態になってしまう。こう言う事態というのは、一面　　といっても布団が真ん中に永久に居座る上　　に

殺人事件（コロシ）でも起きたのかと思わせるような惨状が繰り広げられる、即ち今のような事態のことである。

実際に、友人がこの惨状を目撃した時、卒倒し、倒れて手すりを乗り出し落ちそうになった事があった。

何事かと駆けつけてきた階下の住人Aは、何か勘違いしたらしくおもむろに携帯電話を取り出した。

そうして危うく、犯罪者にされてしまうところを、「ちがうんですちがうんです」と弁解したことはもう、恥ずかしくて、思い出したくも無い。

あ、思い出してしまった……モウ、ハズカシイヨ！

また話がそれてしまった。……………。

さて、私は起きてから二度目のため息をつき、汚れたシーツを布団から剥いでビニール袋に入れた。パンツも勿論入れた。

タオルで身体を清めから、先ほど掘り出した服を着て、たたみを雑巾で拭き、やっとこ一段落ついた。

私はもう、落ち着きを取り戻していた。経血の事ではない。バイトの事だ。

「もう、クビは確定である。謝ったって、ダメであろう。あのバイトは繋ぎだ。次なる目標のための糧となったのだ！」と思うよう



にしていた。

しかしながら、少しばかり涙目なのは、尻が痛いだけではない。

額に流るるひとしずくの汗を袖ぐちで拭い、コインランドリーに行く事に決めた。

こんなにして、此処に置いておく訳にもいかない。洗濯物も、溜まっている。

私は先ほどのビニール袋に、その他の洗うものも入れた。もちろん多い日も安心なものを着けるのも忘れない。

急いだので突っかけが上手く履けず、階段から半分ほど転げ落ちた。また漫画のように、「ギャ！」と叫んだ。

尻餅につくづく縁がある日である。いたいいたいと尻をさすっていたら、何事かと階下の住人が駆けつけてきた。

彼は、私の手に持ったソレを見るや否や警察に電話しようとしたので口を塞いで電源を切ってやった。

そしてまた、「ちがうのですちがうです」と弁解し、今度は自室から、雅貴に貰ったカステラを一本持ってきて階下の住人の口へ押し込んだ。

彼はニコニコと恵方まきのように、それを貪り始める。これで5日はもつだろう。一人身の分際でカステラをまる一本齧ると言う屈辱を存分に味わうがいい。

さてと……見上げる空には風に流された飛行機雲が消えかかり、少しばかり西に傾いた太陽が「おれはまだやるぜ」

と言わんばかりに燦然と輝いていたので、私は眩しすぎて逃げた。そして裏道のほうからいくことに決めた。

歌を口ずさみながら、私はイチヨウ並木を進んだ。黄色くなり始

めの葉っぱが風に吹かれて、いまだ青い実を揺らしていた。  
無論、まだ臭くない。もう少し寒くなり、朝早く此処にすれば、  
近所の老人が、せっせと一心不乱に銀杏を拾っているだろう。  
そして今のように真昼を過ぎた頃は、彼等は家でご飯を食べてい  
るか、ゲートボールに精を出しているのである。夫婦水入らずで  
将来は自分もこうなりたいと思う私だった……。嗚呼ア 惨め  
みじめ……。

「穢れのないーい その瞳に 映るは遙かあー中華の地い！」  
私の口からは、何度も同じフレーズが繰り返される。多少古い歌  
だが、私は気に入っている。

私は寝起きですぐに動いて、咽喉が乾いていた。  
途中に自動販売機が在ったのでそこで、ジュースを買おうとして  
立ち止まり、ビニール袋を地面に置いてポケットから小銭を取り出  
す。

「なにを買おうか。迷うなあ。ん、これは何であろうか」

私が見つけたのは、なんだか懐かしい気持ちになるデザインの缶  
ジュースであり、名を、『過去コーラ』とあった。

よくみると、自販機自体もなんだか古風というか古臭く、売  
られているのが、過去に流行ったことがあったような、

いまだ見ぬ未来に流行りそうな気がする、見るからに雑多であり、  
およそ統一性が無い。古臭い上に胡散臭かった。

そういえば、ココを何度も通ったが、こんな自動販売機を見たの  
は今日が始めてだ。

最近に置かれたのなら、もっと新しいデザインなはずで、実に、  
奇妙だ。

だが私はそんな事、お構い無しなのだ。

「まあいいわ。ジュースはジュースだよ。多少古くたって、大丈

夫。あたしのおなかはじょうぶだもの」

投入口に一二〇円を入れ、ボタンを押す。と、件の『過去コーラ』がごろりと出てきた。

私は腰をかがめて取り出し、その冷たさに頬擦りした。

「秋になった、というのは嘘っぱちではないか」と言われるでも毎年言われてるような気がする　そんな近年。

それは二酸化炭素だけではなく海中の『めたんはいどれーど』と呼ばれる物質が原因だそうだが、

テレビで見ただけなので、『めたんナニガシ』が一体、どのような悪さをするのかを、私はわかってはいない。

だが、そういうしつたかを言いたいのもヒトである。私は凡人だった。

しかしたまに吹く、木枯らしが、ひゅうつと一瞬、通り過ぎる時だけは昔と変わらなかった。

私の去ったあと、金色まがいの葉っぱが、風に飛ばされ、あやふやな秋空に舞い、散り、どこかに消えた。

そして飛び散ったイチョウのように、古臭い自動販売機も忽然と姿を消していた。

代わりに、熱せられたアスファルトから、陽炎めいた霧が立ち上がり始めていた。

どこかでねずみが、チュウと鳴いた……。

@：なんか変な感じ

コインランドリーについて、私は血まみれの洗濯物を放り込み、蓋を閉め、小銭を入れた。

ごうんごうんと洗濯機が回転し始めるのを確認し、先ほど買った『過去コーラ』を飲もうとブルタブをあけようとした。

その時、成分表示なにがしが書いてあるはずの欄が、すっぱり消えており、代わりに危なげな髑髏「どくろ」のマークがはいっていた。

注意書きもあった。私はそれを声に出して読み上げた。客が他にいないので、声の大きさを気にする事は無い。

「『おいしくないです』……莫迦か？」

そんな事、缶に書くやつがいるだろうか。しかし現にその症例があった。これが現実だ。

味も、現実だった。実に、まずい。しかしそのまずさが癖になる者も出てくることは、想像に難くない……。

5分後に飲み終わる。私はげっぷをし、手をパタパタ振った。

いつもはげっぷの息を、どこか遠くへ散らすためだが、今日は違った。妙に気温が高く感じる。

室内の壁掛温度計を見ると、29度とあった。温暖化此处に極まれりである。

端のテーブルの上に、先ほどは気付かなかったが週刊誌が置いてあった。

1ヶ月ほど古いものだったが、真新しいような感じを讃えている。暇つぶしにと椅子に座り、足を組む。私は置き去りにされた雑誌を読み始めた。

《先月始まったアニメの特集。人気の新刊。漫画。みかん。漫画。広告小説仕立ての猥文。卑猥な写真。

袋とじ。広告。流行ファッション。広告。広告。美味しいもの。古今世界の状況。みかん。広告。小説神芥川。

寒い秋についての注意事項。ガンダム。おいしいはっさくのたべかた。エヴァンゲリオン。ファンタジー小説。引篋り。

有名人のエッセイ。あの人は今。太陽系外進出。だいこん。現

在の月基地生活の特集。月にいるウサギ。みかん。ウサギになった地球人。

未来S.F。今月の天気。今日の運勢。猥文。偉い人の言葉。みかん。自作パソコンについて。猥文。読者投稿。広告。みかん。来月の特集。広告。エトセトラエトセトラ・・・》

雑誌を読み終える事になると、洗濯機の回転は止まり、脱水と乾燥も済んでいた。

私は持ち帰り用のかごを借り、そのなかに無造作に、洗われて真っ白になった洗濯物を入れていく。

「これは借りるんだからね。何時か。返しに来るんだからね」と私は言っているが嘘であろう。

このかごは借り物なので、当たり前だが、また後で返しに来るのだが、何故か私の部屋の押入れに一つあるので、これもその仲間入りをするのだろう。

押入れの先住民は、まだ8月頃に、雅貴「まさき」と一緒に部屋へお持ち帰りされたものである。

つまり今は9月であるから、1カ月も洗濯をしていなかったのであつた。

去る8月、雅貴に「おまえは女の風上にも風下にも置けないわ」と罵「ののし」られたので

私は「では穴倉に籠って仙人になろう」と返した。友人はため息をつきながらも、私の部屋の片付けを手伝ってくれた。

因みにその時押入れには先住民がたくさん繁栄を極めていたので、彼に阿呆「あほう」と小突かれた私はしぶしぶ、コインランドリーに強制送還した。

その帰りに連れてきた一人にも、雅貴は「帰れよな」と通告したのだが、私はあいもかわらず知らん顔でやり過ごした。

雅貴は溜息をついた。溜息をつくのは彼の癖である。

話を戻す。

ふたたび越境を余儀なくされたかごを手に、私は、コインランドリーの扉を開ける。もあーっと、熱気が真夏のように押しかけてくる。

なにやら暑過ぎやしないだろうかと思ったが、なにせ私は引き籠もりがちである。クーラーの効いた部屋でぐったりするのが毎日だ。ご飯は深夜のコンビニ弁当一回で済みます。だからお昼2時位はこう言う熱気なのだろうと引き籠もりがちな私は思い、歩を進めた。

のんびり歩いていくと、熱さにうだれる人々が、寒冷の地を求めてゾンビの如く彷徨っていた。

彼等の脇をすり抜けるたびに汗の匂いがした。私もそんな匂いにするのだろうかと確認すると別の意味で臭かった。

自室に籠っていた4日間、一回も風呂に入っていなかった。髪の毛はさばさばで、みつともなかった。

「風呂に入ろう……」

流石にこれだと、私は本日三度目の深い溜息をついた。

@汗臭い話に山なし落ちなし意味なし

帰る時、私は別の道を通った。その際にある銭湯へ行くためである。

夕時から夜明けにぎわう此処も、昼間なので他の客はいない。番台にも誰もおらず、ただ招き猫がちよこんとすわっていた。

「にゃー」と呼びかける私だが、招き猫は知らん振りだ。

私は猫背の箱に大人一枚の代金を入れ、女湯の暖簾をくぐって行った。

その時、私の後ろにねずみがちよろちよろ着いてきた。言うまでも無く私は気づかない。

招き猫も、手で顔を拭うだけだった。

何年着たのか分からないクタクタによれたＴシャツと色落ちしたジーンズを脱いで籠に入れ、

シャワーを浴び、備え付けの石鹸で身体を洗い、かけ湯をして湯船に浸かる。

「あゝあゝ――――――――――」

私は本日四度目の溜息をついた。驚くべき事に、このバケモノのような叫びも、溜息の一種なのだ。

しかしこれは今までの後悔のものではなくて歓喜のものである。じいーと、湯から立ち昇る穏「おだ」やかな蒸気を見ていると、ふと、今日見た夢を思い出した。

「あの巨石建造物、玄武岩で出来た橋、遠めに見た黒い点々、奇妙な小像、濃霧にまぎれた老人……」。

この、今でもはつきりと思い出せる夢は、どこかで見たようなモノばかりだなあ……」と苦笑する。

昔、８０年あまり前の小説家におつかない話を専門に書く人がいた。

彼は様々なものを書いて色々な人たちを恐がらせたすごい人だ。

彼は、『クトゥールー神話』と呼ばれる架空神話体系のおおもとを築いたことで有名だ。

その宇宙的恐怖に魅せられた者らがこぞって我先にと書き足し、足して、足して、どんどんその神話は膨らんでいった。

そして、またまた色んな人を恐がらせた。所詮架空の物語で在るが、

どれも現実味を帯びた文章で綴「つつ」られており、まさか本当か、と思うようなところもある。

その神話中に、私の見た光景に似たものが存在するのである。

「だがあれは夢だ。宇宙的恐怖は空想だ。プロヴィデンスの少年が魘（うな）された悪夢は、所詮夢で、それを彼が書いた作り物なのだ。」

だから邪神などいないのだ。ヒヤデスのあいつもいないのだ。よってあの先生もいるはずが無い。

だからあんなところは現実には存在しない　だが、だがだが、少年が悪夢を見て魘された、と言うのは、

紛れも無い事実なのだ……、恐ろしい、恐ろしい宇宙的恐怖、そして、近隣で起こる殺伐とした感じの悪い悪夢が、あたしを包み込み　！」

私は、そんなこんな妄想を振り払うべく頭を振り、濡れた頬を叩いた。

「ぺしんぺしん！」

だが空想は着実に妄想へとつながり、妄想はさらなる白昼夢へと繋がる……。

@：なんか変2

私は、自分の部屋にいた。

ドウシヨウモナク窮屈な、布団を押しつけ、机に向かう。

書きかけの同人誌、飲みかけのコーヒー、それを見る目を充血させた私。

それらを照らす輝くモノのは、スタンドライト、イーノートのブルーバック、カーテンから零れる微かな月明かり。

聴こえるものは、『鍵』であつた階下の住人の詠唱の声ばかり。左右の部屋には誰がいたかも分からないし、分かる必要ももう無



い。

頭が変になりそうな、否、もう充分変になっているこの空間にいるのは、私一人ではない、もう一人がいた。

雅貴がいた。開けられることの無い、押入れの中に居た。

押入れの中で、生きているのか、死んでいるのか、分からない存在となった彼は、彼女に向けてふすま越しに微笑んだ。

また私の方も彼へそつと微笑みを向けると、服を脱ぎだした。

表れる白い肉体、太陽を浴びていない無垢なる身体、純潔を保った少女の裸体、だがそれは、純潔でありながら汚れている、邪悪の塊、宴会の肴。

残りの冷たく冷えたコーヒーを咽喉に流し込んだ私はカーテンをくぐり、立て付けの悪い窓を開ける。あの秋の、心地よい寒気は、もう感じる事は無い。

鼻につく、燃えても燃え尽きる事が無い、煙の臭い。

考えられ得る全ての甲殻類の、腐った臭い。

何かがのたうつ生物的な、擬音。

世界に悲鳴はもう、聴こえない。

待っていたかのように粘液を纏った触手が、私を下宿の屋根に持ち上げた。実際待っていたのだ。

眼前に見える、天球を突き刺し聳へそびえ立つ卑猥な形をしたものは、異界の灯台だ。

それは此処に元はもっと一杯ナニカが居たと言う事を残し続けた一つの証拠。

他はもう、崩壊し、すでにその瓦礫も砂になった。

屋根に降り立つ、私。べこべことへこむ、トタン板。触手は凄まじい臭気を放ち、先端から粘液を噴出する。

私へぶつ掛けた自らの桃色がかった白濁をみて興奮したのか、い

っそう怒張する触手たち。

のたうつ肉棒はなおも数が増え、下宿を飲み込み、さながら尻からでた寄生虫を思わせた。

「嗚呼あ　、嗚呼あ　、ふんぐるいふんぐるい、嗚呼あ　、ふたぐん、呼嗚呼嗚嗚呼アア……、」

私の妖美な声。白色のギョウチュウらはその詠唱と共に歌う。

ぐちゃりぐちゃり／くちゃくちゃ／・・・・・・・・・・・・・・・・／

淫猥な音を出す、私に纏わりつく触手たち。

何本も何本も這い回り、足を、腿を、陰部を、腹を、胸を、首を、口内を、頭を、舐め回し、鬬り、弄り、姦「まわ」す。

しかし私は一向に、いままでとかわらぬずっと同じな、退屈で光のない、絶望を超えた瞳で、針のように細い月を、見上げていた。

「こんな世界を望んでいたんじゃないのに。頭がまっくらで一杯だ。嗚呼「いあ」ア、嗚呼「いあ」ああああ……、」

晶は諸手を挙げて叫んだ。涙が溢れても、最早粘液と見分けがつかない。

呼応するように触手たちの動きが加速する。ついに蟲達が私の胎内へと入った。

もっと刺激を！

もっと気持ちよく！

もっと、忘れたいのに！

嗚呼、もっと、感じて居たかったけど、

感じない、貴方の身体は感じない、

でも貴方の心は、あたしと一緒に生きている！

嬉しい、ウレシイ嬉しいワ！

アハハア×アアアハハアアアアアハハア×アッハアアア  
アアア×アアーアアアアアアアはっはああ×はああい！！！！

触手の一部となった私は、持ち上げられ宙に浮き、絶え間ない振動と、蠕動を、繰り返す。

快楽によりて、痙攣を繰返す私。鼻からは鼻水が、ガラシナク開けられた口からは涎が、依然として流れる涙、汗、膣分泌液、赤い血液。

それらは触手の吐き出す粘液に混ざり、形を変える。全てを舐め盗って行く触手。私からナニモカモを奪い取っていく触手。

私にはもう、何も無い。だから、彼等に快楽を与えて其れを返さなくてはならない。

犬の陰茎を伸ばしたような触手を口に頬ばった。それはすぐに咽喉の奥へ、自分から入っていった。

どろりとしたねばねばが、肺に直接注入される。すぐに咳き込み、吐き出す私。自分自身の味がした。

嗚呼あ、ああ、アアア嗚呼あ、体感的な官能が全身を駆け巡る。

ドウシヨウモナイ体の疼き、求めるものはもう無いのに、もう、手に入らないのに求めてしまう、もう諦めていたのに、全然諦めさせてくれない。

希望なんていらぬ、絶望もいらぬ、欲しいのは沈黙、白い闇、真っ白な、真っ黒な、やがて来る、やがて降り積もっただろう、雪の結晶が汚れに犯されるような、……。

でも貴方を感じるコノあたし心だけは、摂らないで下さい、お願いしますウウウ。

あ、あ、あ、いい、いい、いい、これは矛盾？ ……ドウだろうね

……。以下続き。

嗚呼あ、ああ、アアア嗚呼あ、　　、　　嗚呼あ、ああ、アアア  
嗚呼あ、　　、　　嗚呼あ、ああ、アアア嗚呼あ　　！

嗚呼あ、ああ、　　嗚呼あ、　　嗚呼あ、ああ、アアア嗚呼あ  
、ああ、アアア嗚呼あ、　　、アアア嗚呼あ、　　、アアア嗚呼あ  
……ほああーいあ。

狂乱は、途切れても一瞬。そしてすぐに再開する淫猥な宴。それは永遠に永劫にどこまでもどこまでも……求め続けて求め続けない  
しかししかしどうにも矛盾でアアアアア　　いあいあああ！！

《ブルドーベイ》

《それは油田》

《ブルドーザー》

《それは重機》

《AK-47》

《それは銃器》

《ばばばん、ばばばん》

《劇団員はみんな撃ち殺された》

《みんな幸せに死んだスイーツ（笑）》

《幕閉じ》

《再開幕》

《ビーーーー

ブザー音》

@違う、何かが違う……

意識が戻ると、私は布団に寝ていた。見慣れた下宿の部屋であった。

私の椅子に座って溜息をつく男がいた。友人だ。名を狩野雅貴（かのうまさき）と言う。

雅貴は、私が起きたことに気づくと、椅子を回転させ、私の方へ視線を向けた。

「キミは本当に馬鹿だなあ。人の家（ひとんち）ならまだしも銭湯で寝るなんて、最近の駱駝（らくだ）でも思いつかん。」

そして汚いこの部屋は何だ？ 今度来て掃除をしてやる」

あの銭湯は、彼の家で経営をしている。私はのぼせて気を失ったのだった。

「ふん。ではあたしはペンギンになってやる。空は飛べないから氷の下に籠（こも）ってやる。お前が来るまで出てこない」

「この引き籠（こも）もりめ」

「あー貴様あ、あたしをいじめたないじめたな？ いじめられて絶望した！ いじめるやつは愛護団体に引き渡すぞ」

「それは大変だ。ペンギンを守るべき騎士は、彼女の住処の汚染を防ぐべく明日は、掃除に明け暮れるだろう」

そんなやり取りを何べんか交わした。私がかかなり元気なことに安心した雅貴は、

「冷蔵庫に珈琲牛乳入っているから飲んじゃダメだよ？」と言いつ残して去った。

彼が帰ったあと、疼く頭を抑えながら立ち上がり、

「だがあたしは開けるのだ」

私は天邪鬼だ。なので言われた事を無視して冷蔵庫を開けるのだ。

だが冷蔵庫の中には、珈琲牛乳ではなく、ポカリスエットが入っ

ていた。

天井裏で、ねずみがチュウと鳴いた……。

@:これも愛なのかしらん

プシュ、と音を立てて窒素ガスが出る。キャップを外し、そのままがぶ飲みする。頭はまだくらくらした。

テレビを見ようとパソコンをつける。この部屋には、家電製品のテレビは無い。

シャープのロゴの後ウィンドウズMEの起動画面が出た。いまさらこんな骨とう品を使っているのは私くらいなものだ。

私のイーノートは、いつも止まって青い光「ブルーバック」で室内を照らすことを生業「なりわい」としている。

デスクトップのアイコンをダブルクリック。アプリケーションが起動され、デスクトップの上に窓が出て、ニュースが始まった。

『今日は猛暑でしたね、隣の女子アナさん？ では8月9日の今日のニュースワイド……（ry』

「はて、ききまちがいだろうか。たしかに今日は8月9日と言ったようない……？」

私は首を捻る。なんども繰り返して『今日は暑いですねあついですね』『今日は、8月9日』とキャスターは言うのだ。

もしかしたら、「録画放送を見ているのでは無いか」と思い、チャンネルを変える。

読み込み時間の後、同じような顔をしたニュースキャスターは言った。

『今日は猛暑でしたね、隣の女子アナさん？ では8月9日の今日のNHKMADニュース……（ry』

やはり何かおかしい。googleで『今日は何日か』を検索す

る。結果は案の定だ。

もしかしたら、時間を戻されたのかもしれない……。即ち 時間跳躍「タイムリープ」。

しかし、コノ時間帯、私はナニヲしていたか……。

そうだ。今日のこの時間、私は独りですやすや寝ていたのだ。記憶と現状に矛盾が起きた。

確認のために、私は押入れを開ける。玄関に放置された満杯の洗濯かごと同一のものが、たくさん不法滞在していた。

彼等は、来「きた」る8月10日に強制送還される身の上だった。

SFでは、時間航行をする話が数多くある。

マッド博士がそういう機械を作った、ラベンダーの臭いをかいだ彼女のいとしの彼は未来人だった、

ある日起きたら超能力に目覚めた、かのじょが願ったから、神様の気まぐれ、

階段で転んだ、実は死んだ後の世界、さらに宇宙人の陰謀説、さらに実はその宇宙人はサラリーマンだった、

時間跳躍じゃなくてパラレル世界だった、宇宙的恐怖、などなど、エトセトラエトセトラ……。

そしてたいてい良い結果にならない。なぜなら『タイムパラドックス』が起きるからだ。

時間の航行が乱され、混沌たる宇宙の泡沫「ゆめ」である時間軸に守られたこの世界の因果律が狂い、

観測者と被観測者の関係やらなんやら、それらの相対性が濁流に呑まれた様に一気に崩れて流さるので

世界は崩壊を始め、もともと過飽和である水溶液に現れ出「い」でた結晶である物理法則のとってつけた外皮を哀れにも丸裸にされて根幹からちゃん切られる。

嗚呼アー悲劇だ。最早それに縋「すが」るしかなかった人類は、生き物は、森羅万象自体、世界は一体、どうなってしまうのか分か

らないがどうかなくなってしまっただろう。

再び混沌の秩序は沸騰を開始して、我々の世界を溶かし尽くし、自らの不確定の法則の内に仕舞ってしまうのかもしれない。

「この二つの矛盾が、混ざり合う事無く存在する。それは、世界は概念的に一本道ではない事を示す。

もし一本であれば、あたしは前の記憶を忘れているか、今の記憶といっしょくたになって、次第に薄れて、忘れていくはずだ。

だが、あたしの記憶は鮮明だ。慄然と固体と化し、混ざる事は無いだろうそれについてはあたしは、あたし自身に照明できるのだ。しかし、この先、さらなる矛盾がおきると、危険だ。何か起きるだろう。だから、気をつけよう。

世界のほうも、あたしを味方してくれるはずだ。きっとそうだな。なんとかなる……さて、明日は、何が起きたっけ？」

幸い、矛盾は少なかったようである。

私は絶滅危惧種であるSF者だった。しかしその割には、説明がおりそかである。

私は自分がSFの主人公になるなんて思っても見なかった。

だがそんなこと本気で思っているやつがいたら、そいつはただの馬鹿モノで、唾棄すべき存在だろう。

今回の、私の頭の中に慄然と存在している、『あたしは一人で寝ていた』『あたしは雅貴と一緒にいた』という矛盾（パラドックス）。

この二つの記憶が互いに交じり合う事も何も無かったのでそういう壮大なことは起きていないようである。ダカラ安心した。

「大学の夏季休業（なつやすみ）も残り少なかったではないか。これでまたかなりを遊べるじゃあないか。これは得をした。得をしたぞ！」



と晶が喜ぶのも束の間、この時、まだ論文は書きかけであった。またあの大作を書き上げなくてはならないのだ。晶は湿った万年床に突っ伏した。

枕もとに空いたお酒の缶が並んでいた。ごみ箱もやまもりで溢れており、最早、この部屋全体がごみばこだった。

更なる圧迫を齎へもたらず」す環状本棚の中でも平気で住める女は、ここいらでは晶くらいだろう。

そうだ私晶は考える事もしない馬鹿ではなく、圧倒的な阿呆「あほう」だった。

「そういえば言っていたな、明日だ。明日に、雅貴が、あたしの家に、掃除しに、来るんだ……」

私は溜息をつき、薄いせんべい布団をかけて寝た。

SF者はたいていの場合、身に降りかかる厄災が少ないと「大丈夫」と樂觀する。

……それもどうかと思うがね……。

翌日になって、起きてみると、床一面　といつても布団が真ん中に永久に居座る上だが　が血まみれだった。

「歴史は繰り返し返される、時間は簡単には捻じ曲がらず、修復されていくということか」

私は自分が生理だということを忘れていたということは露ほど思わない。

寝ぼけ眼で少し待つ。すると、雅貴が来た。鍵の壊れたドアを開け部屋に入った彼は、その惨状を見るや否やビクリして腰を抜かした。

そんな雅貴に私は言った。

「へっへっへ、多い日も安心！」

「多すぎだろうよ、常識的に考えて」  
雅貴は常識的だった。

今回、彼は手摺りから落ちそうにならなかった。ので、階下の住人も駆けつけなかった。そういう風に時間は書き換えられた。私にはその方が都合が良かった。流石に同じアパートに暮らしている人にその後ずっと、不信がられるのは嫌だもの。

「まあ順調に時間が進んでいるのだからいいだろう……、ああー  
雅貴いー、こつちも拭いてくださいよ」

私と雅貴はせっせと掃除した。だがだいたいのせっせは、雅貴のものだったのだが……。

空き缶も、溢れたゴミも、全部袋に詰めて、ゴミ捨て場に棄てた。掃除が終り、私と雅貴は、コインランドリーに向かった。二人とも、白いかごを抱えていて少々前が見ずらかった。

表通りから行こうとしたが、今日はやけに、車が多かった。事故があつて、通行止めらしい。日差しも強かったので、イチヨウ並木の方から行く事にした。

しかし突然、表通りの渋滞に耐え切れなかった車に、並んでいた二人は吹っ飛ばされた。宙で弧を描いて、激突するアスファルトに顔を削られる私はしかし、生きていたのだが、もう長くは持たない。もう持たない。すぐ死ぬから。

雅貴は、すで死んでいた。即死だった。胴体が二つに折れ、頭から血と脳髓が噴出していた。

私は絶叫した。しかし音は出ない。グシャグシャに咽喉が潰れていたからだ。

その 声にならない声が、胸の鼓動と共に、排出される血と共に、小さく小さく、潰れていつて終(ついに)には消えた。

ねずみの声が何処からか聴こえたが、それもまた同じように消え

た。

代わりにどこから、盛大な拍手の音が聞こえた……。劇場の幕が閉じる。観客が帰る。

パア　世界が点滅。点滅、果して真暗に。

ナニモカモが無くなったような曖昧な世界になった。

でも、客席からはモウ見えない、高台には、彼女と彼の死体だけはちゃんと取り残されて、存在を確認できた。

@：《再開》は面倒だから流れた

「ハッ！！！」

私は目を覚ました。目の前には、見慣れた、顔のような模様があ  
る低い天井があった。

時計を見た。午前8時、日時は9月9日。時間の飛んだ日に戻っ  
ていた。いや……これは。

「あれは夢だったのか……」

玄関には洗濯はされたが使われずに、埃をかぶっている衣服が大  
量に、かごに詰まっていた。

私が布団から出ると、ごとりと、物音が押入れからした。何事だ  
ろつと、私は開ける。すると、物音の正体は、

額がぱつくりと割れた雅貴の首だった。私はそれをゆっくり持ち  
上げる。

腐り終りゆっくりと乾きつつある彼の瞳に映る、自分の笑顔を見  
た。

そして私は彼を脇に抱え、四畳半を出た……

有機的な胎動を繰り返す階段は、踏みしめることに卵管から卵を

産んだ。

卵は気が気でないキミドリ色をしたアスファルトの雑草に受け止められて三カ月後に新しい階段の赤ちゃんが孵化した。

二人はテクテクと、国道さんさんさんよん号線を跨いだ。

またがれた国道5さんなななななな7号線は桜が咲き乱れて火山が噴火した。

咽喉が渴いた二人は公園のミズ飲み場でミズを飲んだ。

ポチャンと漬けられた雅貴の断面から新しい雅貴が生えてきた。

私はその雅貴だけを選別し、今まで持ってきた雅貴を土に埋めてミズをあげた。

背後ではナニカの叫び声が聴こえたが、私と雅貴はテクテク歩いた。でも木製のマジックハンドに捕まえられてしまった。

ちくたくちくたくと叫ぶ、構造上開かないのだけれども開く柱時計の針。四本の時を刺す針。紙次元を突き抜ける！

チクタクマンがまた叫ぶ。針が、叫ぶ。四本でありながら、無機物の有機物的なユーグリットの数学的なアーマメンツなのだからっ！

アーマーを装着した私。

私に装着されるアーマー。

雅貴は私の頭の上でこの先どうするのかを考えていた。

どうするの？

私は核になった。世界は私になった。地球は私の子宮になった。子供が生まれ、その子孫が増える。そして絶滅する。死んだ、生きた、繰り返す、ああはいいでありながらめぬであるのだった。あ

あああ。

果してその後も二人は幸せに暮らしたとき。これはハッピーエンド。

《終幕、幕閉じ 拍手が鳴り止まない》

《スピーカ音量を下げる》

《BGM、SE切る》

《再開幕》

《やっぱり、私がおかしいのかなあ……》

@：世界が震えている

「ハッ！！！」

私は目を覚ました。目の前には、見慣れた、顔のような模様がある低い天井があった。

時計を見た。午後12時30分。日時は9月9日。布団は血で染まっていて、洗濯物は玄関ではなく、私の足元にあった。

ブルーバックとカーテンからの木洩れ目で目を覚ました私は、少々、ボット、考えていた。

「あれは夢だったのか……」

携帯電話を探し出す。染め布団の下にあった。新着メールがあり、『クビ』との題名だった。内容も、案の定だろう。だから開けることはしなかった。

私は電話帳から、雅貴を呼び出す。電話の奥で、彼の着メロが鳴った。

「『人おーの心を胸に秘め 終末の時いーに涙sブツッ』……もしも晶。俺ですが何か」

「……うえうえ……」

「そうかそうか。イワンでも分かる。イワンはロシアンです。嗚呼、でもシベリアにペンギンはいないなあ」

「あいい、ペンゲイン　　ッ！」

「これはいい発音だ」

「ペンギンって、誰のこと？　あたし？」

「誰だってキミ、この前さ。一ヶ月前か。掃除してやっただろう。その前の日、キミが家「うち」の銭湯で溺れたよなあ。

そしてのぼせたお前をソコに連れて行ってそして……」

「あ」

「思い出したか」

「うん……まあ……」

「そうかあ……じゃあ、とりあえず喜べ。俺は、今、暇だ。そっち行つてやろう」

「え、来るの？」

「嫌か？　キミは絶対『一人でさみしいんです』って言うんだろうと思ったんだが」

「いやいや、嫌じゃないわよ。そうね。じゃあ、お願い、来てちょうだい。ちよつと、おつかない夢見てさ？」

「ほほう」

「でも、車に気をつけてね。絶対だからね」

私は通話を切る。本来と矛盾している。

「私はあの時絶対に、この部屋で寝ていた。深酒で、二日酔いをしていたのだ。断じて銭湯に入っていない。

だから、彼は前日、この部屋に来ていない。

あたしと雅貴が、一緒に掃除をしたのは、あたしがその前日に、彼に電話で頼んだからだ。だのに……どうして……」

私は、自分の頬を抓った。つめの跡がつくほど力強く抓った。と

ても痛かった。痛みは現実だ。

「これは夢ではない。現実だ。だから思い違いだ。だってあのときあたしは二日酔い（ふつかよ）っていたんだもの。記憶が飛んでいても、おかしくは、ない……」

ゴトリ。

突然、押入れから物音がした。それに私は、薄い布団を被って震えることしか出来なかった。

程なくして、雅貴が来た。私は震える指で押入れをさした。雅貴は、勇気を出して、押入れを空けた。

どさりと重量感のある音とともにころげでたそれは、一升瓶ほどの大きさの真つ白なねずみの死骸だった。

あの、天井にいたねずみだろうか。その証拠にもう、天井からは物音一つしなかった……。

雅貴はそれを、丁寧に葬った。

アパートの小さい庭に、スコップで穴を掘り、そこに埋めた。

私は彼の後ろで、その一部始終を見ていた。

雅貴によって埋められているねずみ。ねずみのウツロな目は、私の方をじつと見ていた。

そしてその眼差しが 『やあ楽しめたかい。でももつとたのしい事が起こるはずだよ、そして此れからね……』 と言った様な気がした。

雅貴はせつせとねずみを埋める。死んでいるねずみが私に向けていた右目もナニモカモが、暗い土の中に埋葬された。

次第に、太陽はさら傾いていった。青っぽい夕闇に、二人とねずみの塚は照らされていた。

私の頬に、ばんそうこうが張ってあった。血が出ていたので、ねずみを埋める前に、雅貴が張ってくれたのだ。

事を終えた二人は水道で、手を丹念に洗った。

私は、今までのおっかない事が水によって洗い流されていくように感じた。

私は咽喉が渴いていた。そういえば起きてから、一口も飲み物を飲んでいないのだ。

勢いを弱め、蛇口を上に向け、水を飲んだ。夏の終わりの水道水は生ぬるく、鉄の味がした。

雅貴が手ぬぐいを出してくれたので、それで手を拭いた。ついでに顔も洗った。えらくさっぱりした。

それもそのはずだ。この暑いのに私は風呂に、3、4日入っていなかったのである。

「まず家（うち）に来て、風呂入れ。その際だから、ご飯も食べていけ。ラーメンをつくってやるしヨーグルトもあるぞ。

今日は親がいないが、泊まって行くが宜しかろう。番台はぬこさまのお立ち台だから気にするな。

だが、俺はキミを襲いはしない。何故なら俺は、狩野雅貴だからだ!!」

「ふふふ……、気に食わないけど、そうさせて貰うとするわ……」

@：クライマックスだぜ！

二人は淡い宵（ゆう）やみを扇ぎ、双方同時に溜息をつき、双方同時に互いの手を握った。

そして私は思った。

「こいつとなら、何があってもやっていけそうな気がする。

こいつは、なにがあってもあたしの傍にいてくれる。



どんな時代にいったって、世界が変わったって、死んでも死んでいなくても、

あたしと雅貴は共にいるんだ、否、あたしがそうさせてやるんだ！」

その決意は固かった。玄武岩より固いダイヤモンドの硬度でなお、こんなにやくの柔軟さを持ち合わせていた。

だが、だいたいのSFでそういう決意をすると、その決意を打ち壊そうとするやからが出てくるものだ。

さて、この世界「モノガタリ」はどうだろう。

ゴゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

嗚呼ア、ヤハリ予期した突然であつた。思えば叶う、この不思議いや、願つてもない事だ。幸福至福不快絶望阿鼻叫喚地獄殺戮磨潰五語後g(ry……

宵やみの向こう、もと来た私の下宿から、弩デカイ爆音が響きわたった。

ぼろい屋根を衝きぬけて、それは顕われた。その大きさをやも、発する轟音に負けず、超越的に、超超弩級だった。

マッド博士の置き土産、未来人からの贈り物、超能力の恩恵、彼女の願いが叶った先の答え、

神の身代わりで在らせられるデウス・エクス・マキナの手による、階段の全エスカレーター化に秘められた謎にせまり、

死神のカマとチーズカマボコの接点が明かされ、やはりうめられていた宇宙人の秘密兵器が、

はたまたSF的に考えて質量保存の決壊であろうやんややんやんとなどの大騒ぎ、などなどそんなこんなを思い起こさせる、

今まで見たこともない奇怪な流派の巨大な門　否、巨大な押入

れが現われた！

押入れの周囲を環状本棚が廻る。早川文庫が踊り、創元文庫が宙を駆けた！

世界の調律が完全に発狂し途切れ砕けてしまふ。操っていたピアノ線はすべて千切れて飛んでった。

弾ける黒塗りの箱、鍵盤すらも、卑しい難民の使う割り箸となるだろう。

ぬめぬめ粘液を滴らせる、その押入れは何とかそいつ等を押しとどめてはいたが、もう限界だった。

いまこそ真の邪悪を解き放とうとしていた。

襖が内から叩かれる、ぎちぎちと軋む、撓「たわ」む、張り裂けんとしている！

いあ！ いあ！ 外なる神「アウターゴッド」、顕現し給え！

嗚呼ア、狂気に犯される、闇黒に充ち満ちる、邪悪に塗りつぶされる、遙かな銀河船団浮かぶ、永延の無窮の空を、見上げていた二人。

残酷の競演の見物に飽きた晶と雅貴は双方の顔を確認し、ニヤリと笑い、キスを交わした。

最愛の二人は幸せの絶頂。興奮で、世界が塗「まみ」れる。

塗れた興奮が繋ぎとなり、世界が再構成する、完全再生。

復活した世界は彼女たちの自由になった、二人の二人だけによる二人のための、スープの世界を、メンの世界を、嗚呼ア　ワリバシの世界を！

相次ぐ次元連結爆発が祝電披露の病的な彩色の花火を挙げた  
バンバン！

人々の狂乱の叫びが祝辞を届けた。あらゆる生命の事切れる音は

鳴り止まぬ拍手だ　美しい！

そして門の頭に引つかかった階下の住人だけが、二人だけの結婚式を見届けていた。

終いには誰かの見えない手により、襖は開かれ、世界が、銀河が、外宇宙が、次々あふれ出る……。

『其処でも抱き合った私と雅貴の二人が居た。

其処では男の私と女の雅貴が抱き合っていた。

ある処では少女の私と雅貴が手を繋いで夕陽を見上げていた。

しかしな場所では私は雅貴の娘だった、その逆も然り。

別の場所では最早人間ではなかった。また違うところでは、生物ですらなかった。

精神も無い、虚無なる存在でも、私たちは愛し合っていた。

『其れ　愛は永劫なり。真実の其れは消え去る事無く、超次元的に存在化する。

具現化され、家電粒子となり、宇宙の始めから終わりまでの間を周回する衛星なればこそこの事。

『其処はアラユル場所「エリア」の、二人が集まる駅のターミナル。

最愛なる二人よ、永遠になりて、其処へ集え。

集い集って見せ合い魅せられ愛し合い去り合って、永劫のぐるぐるを続けるよ、阿呆ども……』

《いったん閉幕、私息を吸う／自作の台本を読む　そして以下演説》

@：私の主張

『叫べ、愛するものの名を！』

そして絶望せよ、絶望すらも滅するコノ世界の中で！

しかし、希望せよ！

意志の力が支配する、コノ世界で！

一緒に居たい、共に生きたい、相思相愛の恋人を！

嗚呼アア　　憎い、私は憎悪するぞ！

『私は憎い』

私は彼と共に歩めなかった

私は彼と共に居たかった

私もコノ世界で、意志を持ち、彼と出会いたかったのに……  
それを出来たコノ世界を憎悪するぞ！

『そうだ、コノ物語は、嫉妬だ』

私が掴めなかった未来への、在り得なかった明日への、嫉妬だ

『醜悪の塊である私の、すごく意地悪な私の』

その私の、美しく綺麗な奴等に与える手前勝手の、試練だ

『越えて見ろよ、コノ世界の、晶と雅貴』

二人で生きて、必ず添い遂げるよ

『それが、』

私の　私が私の臨む『晶』として、  
存在したかった、アラユル世界への

だ

『いあ！　いあ！　いざ、開かれよ、アラユル事象よ、事態よ、  
顕現し給え、外なる神！』

『嗚呼ア 爛れた未来を掴んで唯一途に滅び逝けよ、いあいあ  
！！』

@：ポルックスアーマメンツ、意味ワカラン言葉使つな！ ポ  
コッオ！

《BGMはフェードアウトし、画面も徐々に暗く暗くなっていく》  
《この白文字ももう少しで、消える》

《私の言葉も消える》

《存在が、消えていく》

《あ》

《そう》

《だ》

《貴方は、ゲームをクリアしました》

《おめでとう、おめでとう、おめでとう》

《ここで拍手のSEを鳴らす》

《パチパチ》

《パチパチパチ》

《パチパチ》

《パチ》

《そしてウィンドウの内には黒い闇だけが残る》

《一瞬、思考停止》

《再開》

《何か現われる》

《ゲームクリアの文字だろうか》

《再び、何が、再開幕かしらん》

《あ、おわり》

《だそうですはい》

@：以下最終章

劇場はは盛大な拍手が飛び交い、母の隣に座っている少女の『私の瞳には、涙が溢れていた。』

こんなにもおもしろいモノがこの世にはあったのか、そんな事を考えるマセガキがそこに居た。

瞬きは一瞬……そして、瞼を開けると視点は変わり、私は大人になっていた。

観客は、誰も居ないが、ただただライトアップされた舞台。

其処に魅せられる私。私も舞台に立ちたい。舞台が私を呼んでいた……。

私は少女であつた、これからも少女であり続けるのだ。

永遠の舞台で躍る、永遠の少女となつた……。

誰も居ない客席を前に、延々と劇を続ける、道化となつた。

道化は挽歌を語る　それは在り得ざる明日への通告　今だ見

えない群雲の其処の深淵　希望を物語る。。。

《糸冬》

ザッザッザッザ  
...

トボトボ

海

樹

ザッザッザッ  
...





（後書き）

つかれました

ゲームのシナリヲになるはずでしたがお蔵入り  
いろんなモノにつかっています  
そう、いろんなものへね・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8499e/>

---

アラユル世界での彼女の嘆きの挽歌

2011年1月16日02時45分発行